

# ぼくが絵描きになった訳

画家 小野寺 純一

純一少年の家が比較的裕福だったころ、荒町にある音楽教室に、十五才の叔母につれられて、バイオリンを習いにいったことがあります。そのある日、叔母が先生から「この子は練習に興味がないようなので、別の稽古事がいいのではないか」といわれ、とても困ったんだそうです。実はバイオリンの下の方にあるアゴ受けに強くしっかりとはさみこみ、弓に張った弦でギコギコならすもんだから、その振動が鼻本体につたわり、快よい痒さで、つつい穴をほじってばかりいるので、先生も才能なしと見極めたのでしょう。という訳で親の夢みた息子のバイオリニストは消えてしまったのでした。年は過ぎ小学1年になった純一少年は、算数が全く不得意なことがわかりましたが特に勉強するでもなく、あそびの日々を送っておりました。図画の時間に、担任の赤松先生を描くことになって、一生けんめいそれなりにクレパスをはしらせ、バックが緑の背広姿の絵が出来あがると、先生はすごく良いと後ろの壁に張り出してくれ、すごくいい気分になりました。絵を描くとうれしい事があると思ったのが、絵描き人生のスタートのような気がします。



(絵：小野寺 純一さん)

我が家の店が潰れ、一家離散があったり様々なことがありましたが、のちにラーメン店として再起し、出前などの手伝をして中学生になった純一少年は美工班という部活に入り、油絵の具とキャンバスにはじめて出会い、色の深さや油のにおい、筆やナイフをつかった作品づくりはひとつ大人になったような気がしたものです。図書室から借りた図集のルノアールの繊細な筆運び、力強い筆致のゴッホ、美しい自然を描くモネ、赤と黒のマチス、特に怪奇な中世の世界を細微にわたり表現するブリュゲルは、少年のハートを直撃するなど、至福のときをすごしました。この時の感動は、後の作画に影響を与えました。

やがて工業高校へ進学できましたが、工業イコール科学、数学の世界なんですね。悪戦苦闘の日々で、なんとか卒業はできましたがその3年間は絵と生徒会活動にあけくれ、なんとかすべり込みで卒業できたんです。その頃書店にならぶ週刊新潮という週刊誌の表紙に、谷内六郎さんの叙情豊かな世界が描かれ、強く心にひかれるものがありました。もうひとつは図書館から借りてきた絵本「グランマモーゼスの世界」の画集です。素朴な日々の暮らし村の四季などは、私の心になじみ、幸福感につつまれ、絵の方向がみえた瞬間があります。その後生活のためにグラフィックデザイナーをやりながら、ディスカバージャパン東北に関り、カメラマンの運転手兼助手として各地をめぐり、後の制作活動に経験として活かされることになるのです。少年時代に経験し、見たこと、ふれたこと、いろんな人との出会いがあり、それらのひとつひとつを、昭和という背景のなかに紡がれてゆく情景を描きたいという希望も、展覧会を重ねる中で、よろこびとなってきました。絵を描くことは作り手の人生を描くこと、それを支えてきたのは表現するよろこび、楽しさなんですね。これまで多くの人々に励ましをいただき、ご恩にお応えしたいそれが今の願いです。